

金融経済概観

金融市場動向

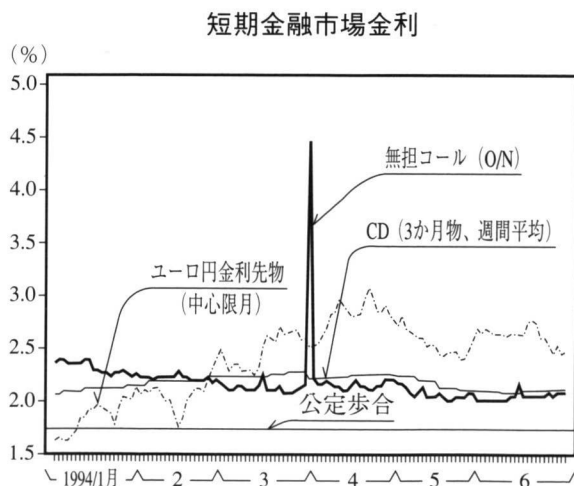
—平成6年6月—

(平成6年7月14日)

1. 短期金融市場

6月中の無担コール・オーバーナイト物レート、CD（譲渡性預金）3か月物レートはともに横這い圏内で推移した。一方、ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は月央以降若干低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は42兆2,111億円と前月（43兆7,783億円）比減少した。

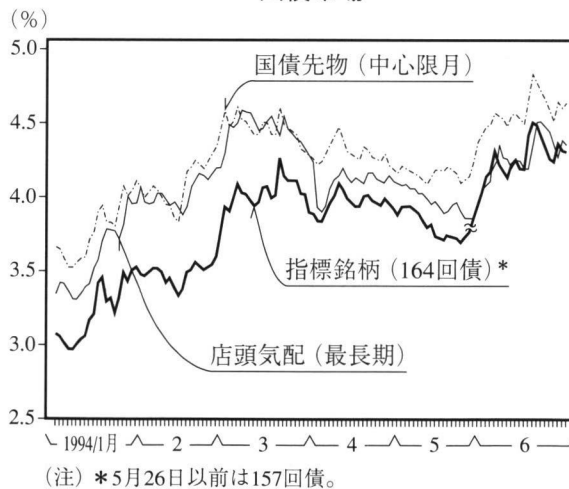


2. 資本市場

6月の長期国債利回り（164回債）は、上・中旬に景気回復期待の高まりを背景に急上昇した後、月末にかけては為替円高等を材

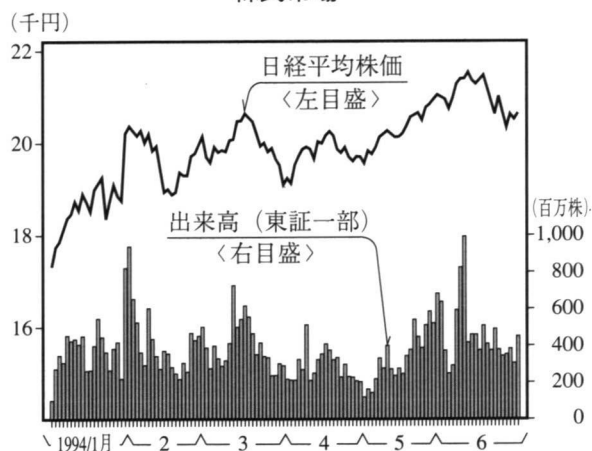
料に若干低下し、結局4.305%で越月した（＜前月末3.840%＞、国債先物中心限月利回りは4.643%＜前月末4.232%＞で越月）。国債の出来高をみると、現物（店頭取引）、先物ともに前月を上回った。

既発債市場利回り
—国債市場—



株式市況（日経平均株価）は、前月からの強地合いを引き継いで月前半続伸（13日には92年2月央以来の21,500円台乗せ）したもの、その後月末にかけては急激な為替円高の進行等を嫌気して下落し、結局20,643円で越月した（前月末比△330円）。また、株式出来高（東証一部月中1営業日平均）は4.83億株と前月（3.49億株）を上回った。

株式市場



起債動向をみると、長期国債（10年物、価格競争入札分）についてはクーポンレートが前月債比0.3%引き上げられた中、総じて順調な入札となった（6月28日入札分＜7月債＞は募入平均利回り4.269%、応募倍率2.74倍）。また、中期国債も概ね順調な入札となった（6月2日入札分＜2年物＞は募入平均利回り2.373%、応募倍率2.19倍）。短期国債については、6か月物が総じて盛り上がりを欠いた入札となった一方、3か月物は好調な入札となった（6月7日入札分＜6か月物＞は募入平均利回り2.161%、応募倍率2.59倍、6月15日入札分＜3か月物＞は募入平均利回り2.071%、応募倍率3.61倍）。

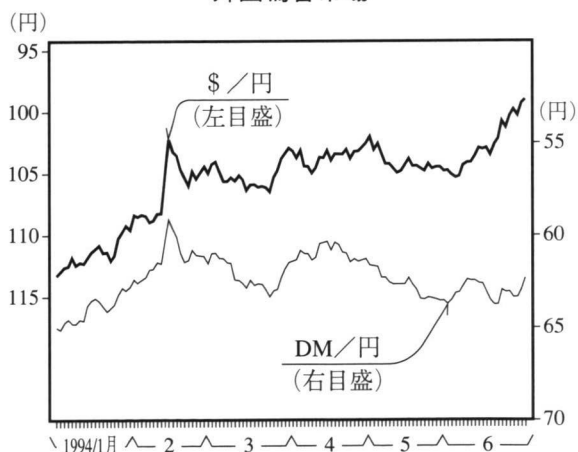
6月の国内公募普通社債は、3,750億円と前月に引き続き高水準の発行となった（5月3,250億円）。一方、国内エクイティ市場での発行（6月払込み分、増資を除く）は、前月を大幅に上回った（5月180億円→6月2,925億円）。

3. 外国為替市場

6月の円の対米ドル直物相場をみると、中旬入り後、一部米政府高官による対日強硬発言や米国インフレ懸念の台頭等から上伸し、21日のニューヨーク市場では史上初の100円割れを記録、その後も堅調裡に推移し結局98.95円と史上最高値（東京市場、終値）を更新して越月した（前月末104.38円）。一方、円の対独マルク相場（東京市場、終値）は、月中を通じて62～63円の比較的狭いレンジで推移し、62.28円で越月した（前月末63.43円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は161.4億ドルと、前月（138.3億ドル）を上回った。

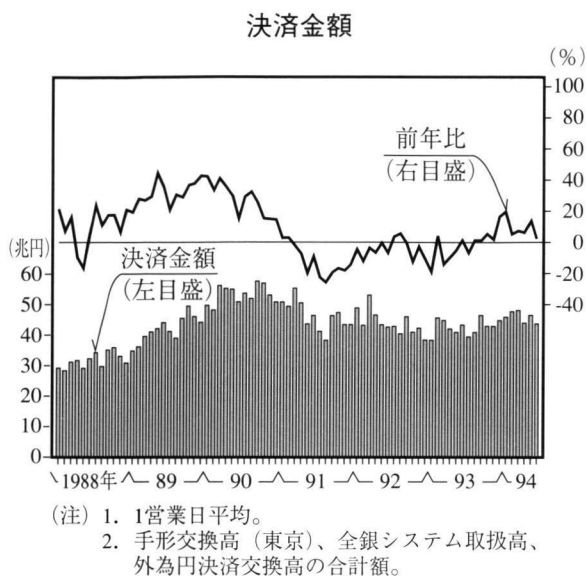
外国為替市場



4. 決 済

6月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を下回った（前年比△14.6%）一方、全銀システム取扱高（前年比+3.7%）、外為円決済交換高

(同+7.7%)はそれぞれ前年同月を上回った。また、国債の決済金額(1営業日平均)については、移転登録(前年比+29.9%)は前年同月を上回った一方、振込口座振替(同△9.8%)は前年同月を下回った。



5. 資金需給、金融調節

6月の資金需給をみると、銀行券要因が2兆6,001億円の不足(前年同月1兆9,449億円の不足)となった一方、財政等要因は、法人税を中心とする税揚げが多額に上ったものの、交付金や国債利払い、保険等の支払いが嵩んだため、3兆374億円の余剰(同2兆2,984億円の余剰)となった。こうしたことから全体では4,373億円の余剰(同3,535億円の余剰)となった。

こうした状況下、日本銀行は買入手形の期日落ちを進めること等により資金を吸収した。

7月の資金需給(国債発行織り込み前)を

窺うと、銀行券要因が公務員・民間ボーナス支払資金の還流が見込まれることから、月中6,000億円程度の余剰(前年同月6,762億円の余剰)となる見通しであるほか、財政等要因も国債元利払い等が嵩むことから、1兆2,000億円程度の余剰(同9,583億円の余剰)となる見通しであり、全体では1兆8,000億円程度の資金余剰(同1兆6,345億円の余剰)と予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

5月のM₂+CD平残前年比伸び率は+1.7%と、前月に比べ0.5%ポイント低下した。通貨種類別にみると、預金通貨、CDの伸び率が低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.2%と、前月に比べ0.1%ポイント低下した。

6月の銀行券平残前年比は+4.3%と、前月(+4.2%)とほぼ同水準の伸びを示した。

6月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残(実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ)前年比は+1.2%と前月比低下した。また、総貸出平残(都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ)前年比は△0.1%と、初のマイナスを記録した。

7. 貸出・預金金利

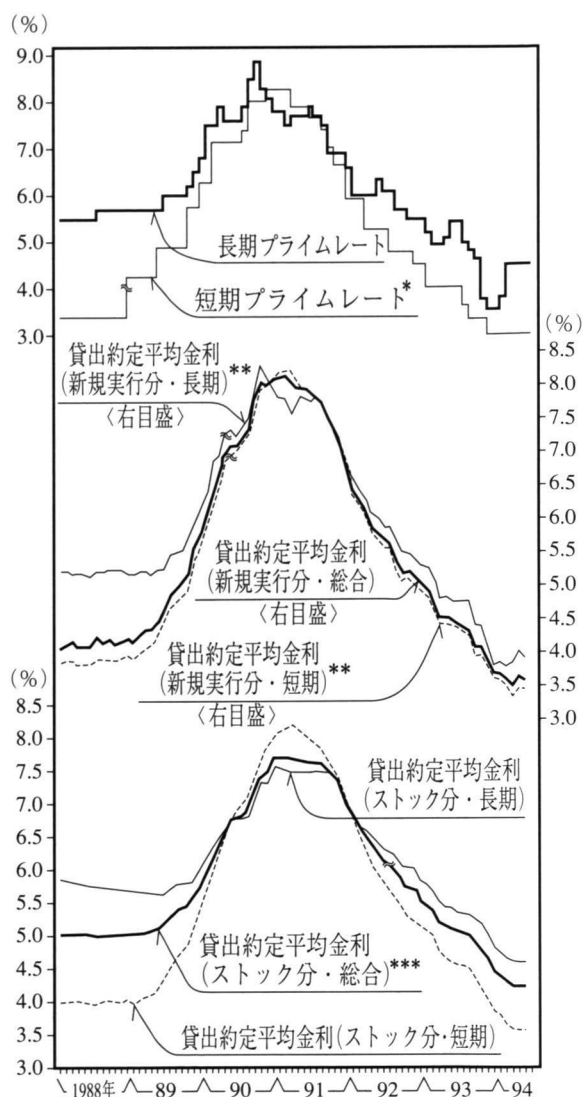
5月中の貸出約定平均金利(全国銀行)をみると、新規実行分については、短期が僅かながら低下した(前月比△0.036%)ほか、長期も3か月ぶりに低下した(同△0.103%)ことから、総合でも小幅低下した(同△0.059%、

総合：4月3.611%→5月3.552%）。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越、総合ともに引き続き低下傾向を持続し（短期：前月比△0.011%、長期：同△0.015%、当座貸越：同△0.006%、総合：同△0.007%）、既往ボトムを更新した（総合：4月4.160%→5月4.153%）。

この間、5月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比低下した（4月2.027%→5月1.999%）。

貸出金利（全国銀行）



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)